

Agatho-henologia and Ontologia 1

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/480 |

善一者論と存在論(一)

— 古代ギリシヤ思想における「善優位」の伝統 —

岡崎 文明*

*Agatho-henologia and Ontologia (I):
A Tradition of Supremacy of Good in Ancient Greek Thought*

OKAZAKI Fumiaki

序論

一 拙論の目的と研究経過

〔一〕「transzendental」…ヘブライズム(存在優位)とヘレニズム(善優位)

〔二〕ヨーロッパにおける中世から現代までの哲学の原理は「存在、生命、知性(認識)」の trias

〔三〕「中世以降の哲学史」は trias の展開

〔四〕新プラトン主義体系の第二段階は、ヘブライズムとヘレニズムの両伝統を繋ぐ鎖の一環

二 問題提起

〔五〕古代ギリシヤ哲学における「哲学の原理・形而上学の原理」たる「善」とは何か?

三 探究場の設定

〔六〕今日の「善」は倫理や道德の概念、「万有の根源」という形而上学的原理(哲学原理)でない。

〔七〕探究の場は「哲学史」と「哲学」の交わる場…ジルソンの哲学史観と新プラトン主義に基礎を置く。

本論

一 善と存在の関係(一)…存在優位の伝統における

〔八〕存在優位の伝統…西洋中世哲学から現代哲学の伝統

〔九〕存在優位の伝統における「善」と「存在」…「存在と本質の区別」と bonum=esse=ens

〔一〇〕存在優位の伝統においては存在論が最基底

二 善と存在の関係(二)…善優位の伝統における

〔一一〕古代ギリシヤ思想の総括…古代新プラトン主義(プロクロス哲学)

〔一二〕古代新プラトン主義(プロクロス哲学)…善優位の思想

〔一三〕agatho-henologia (vel agathologia vel henologia) は ontologia を包括し ontologia のさらに基礎にある

三 善の探究(一)

(i) 目的 (τέλος)

〔一四〕善とは「τέλος」 the philosophy of aspiration

(ii) 古代ギリシヤの神話(一)…ヘシオドス

〔一五〕ソクラテス以前の「目的(善)」に基づく神観、宇宙観、

人間観

- (iii) 古代ギリシャの神話(二)：『神統記』 theogonia と cosmogonia
 - 〔二六〕『神統記』は theogonia
 - 〔二七〕 theogonia=cosmogonia と「生ける自然観」
 - (iv) 古代ギリシャの神話(三)：『神統記』宇宙の秩序原理
 - 〔二八〕 テミス・デイケー(廣川説)
 - 〔二九〕 目的論的宇宙観・神観
 - (v) 古代ギリシャの神話(四)：人間の秩序Ⅱ宇宙の秩序
 - 〔三〇〕 目的論的人間観・テミス(秩序)、デイケー(正義)、アガトン(善)は緊密な意味連関下にあった
 - (vi) 太古のギリシャの「善」の思想
 - 〔三一〕 「テミス・デイケー」原理は古代末の新プラトン主義まで受け継がれている。
- 四 善の探究(二)：ソクラテス(コーンフォード説)
- 〔三二〕 Phaedo における「ソクラテスの経験」
 - (i) ソクラテスの最善世界観
 - 〔三三〕 ソクラテスの「最善宇宙観」
 - (ii) ソクラテスの探究課題：最善
 - 〔三四〕 ソクラテスの δαίμων とアナクサゴラスの ποῦς
 - 〔三五〕 ソクラテス：「ものは善いから存在し働く」：人間の唯一の課題：τὸ δαίμων καὶ τὸ δαίμων
 - 〔三六〕 ソクラテスの「目的論的宇宙観」
 - (iii) アナクサゴラスへの失望
 - 〔三七〕 ソクラテスの意図「善の哲学」
 - 〔三八〕 ソクラテスの善への問いはヘシオドスに萌芽
 - 〔三九〕 ギリシャの善から万有を見る宇宙観・パラダイムは今日受け継がれていない。

〔三〇〕 善優位のギリシャ思想は「存在を超えた善」を求める。

(iv) 人間・魂における善

〔三一〕 ソクラテスは人間精神・魂も「善から」即ち「目的論的に」見る。

〔三二〕 ソクラテスは「善への問」を提起し、解決しなかったが、探究方向を示した。

五 善の探究(三)：プラトン

(i) 善のイデア

〔三三〕 ソクラテスの根本的な問はプラトンによって受け継がれた。

〔三四〕 「善のイデア」の「太陽の比喩」

(ii) 認識の根源

〔三五〕 「善のイデア」は「認識能力」と「真理性」の原因

〔三六〕 「善のイデア」はそれ自身「認識の対象」*γνωσκόμενον*。

〔三七〕 「善のイデア」は「認識能力」と「知識・認識」の原因、同時に「認識対象」における「真理性・可知性」の原因

〔三八〕 「善のイデア」と「デアレクテイケー」：人間には「善のイデア」へ到る道が開かれている。

(iii) 存在の根源

〔三九〕 「善のイデア」は「存在・実在」を超え、諸イデアの「存在の原因」

〔四〇〕 「善のイデア」は万有に君臨する「万有の原因」／「存在」と「認識」と「倫理」の三つの最高原因

〔四一〕 「善のイデア」は、思弁的過ぎて当時既に人々の理解を得ることは難しかった。二千三百年後の現代においても同じ。

六 善の探究(四)：アリストテレス

〔四二〕 アリストテレスの神「不動の第一動者」*τὸ κινεῖν δκίνητον*」

- 「to agathon」…アリストテレスの世界観Ⅱ善の哲学(目的論的哲学)Ⅱソクラテスの間の線上にある
- 〔四三〕アリストテレスの神は新プラトン主義の体系の第二段階の特徴も持つ。
- 七 善の探究(五)…プロティノス
- (i) 善一者…ソクラテスの問
- 〔四四〕コーンフォードのヘレニズム哲学批判を批判する。
- 〔四五〕*Enneadas* (VI、九〔九〕)の「善の探究」
- (ii) 善一者の探究の出発点
- 〔四六〕探究の出発点「すべての存在者は(善)一者によって存在者となる」…プロティノスはソクラテスの問を受け継いだ。
- 〔四七〕プロティノスはプラトンの「分有」という概念を受け継いだ。
- (iii) 魂は一者ではない
- 〔四八〕魂は一つの存在者ではあるが、純粹の一・一者ではない
- (iv) 存在者は一者ではない
- 〔四九〕*to dy to katon to thauon*も「一者ではない」
- (v) 知性は一者ではない
- 〔五〇〕知性は「直知する者」と「直知されるもの」とに二分。知性は一者でない。
- (vi) 知性Ⅱ存在者
- 〔五一〕知性は万有のイデアを知性認識する…「知性Ⅱ」万有」…*transzendental*と*transcendenta*の一思想源泉
- (vii) 一者へ
- 〔五二〕プロティノスの「善へ問いと共に善への勧め」
- 〔五三〕善一者の性質…知性以前のものである、*μ*でもない、*το*も持たない、万有のうちの何か(±)でもない、アリス

結論

トテレスの範疇によって捉えられず、また超範疇のもの
*transcendenta*でもない。換言すれば「存在論」を超えて
いる、言葉も超えている。↓ *theologia negativa*

〔五四〕古代ギリシャはヘシオドスからプロティノスまで目的論
的思想を維持。↓ 古代ギリシャの「善優位(目的論・
善一者論)の思想の伝統」の存在を確認

序論

一 拙論の目的と研究経過

〔一〕拙論の目的は、ジルソンとコーンフォードの見解にそって、
古代ギリシャに「善優位の思想伝統」が実際に存在していたこと
を、テキストに基づいて、示すことにある。そこで、まずはじめ
に、筆者の表記テーマに関するこれ迄の研究経過について、必要
と思われる範囲で要約しておきたい。筆者は、現代における哲学
研究のポイントのひとつは「*transzendental*」という人間精神の在
り方(主観性、有限性、全体性、あるいは認識の構築性、無底性
等々)にあり、これを措いては今日、哲学的な思索はできない、
と考えた。そこで筆者は *transzendental* を手掛かりに、*transenden-*
ta の思想源泉を哲学史において探究することから出発した¹⁾

その際にジルソン (*Etienne Gilson*、一八八四—一九七八)の哲
学史観(善優位と存在優位の二伝統)²⁾を基礎に置いた。この二伝
統は哲学・形而上学の原理を「善」と捉えるかそれとも「存在」
と捉えるかによって区別される。彼の哲学史観は、基本的には、
ヘレニズム(古代ギリシャ思想)とヘブライズムという西洋思想
における二大類型にしたがったものである。³⁾

その上で筆者は、「Transzendental」の思想源泉はヘブライズム（存在優位）とヘレニズム（善優位⁵）の両方にある。そして中世から現代までの西洋哲学史はヘレニズム（古代ギリシャ思想）の形式を借りつつも、その内実展開は「存在優位の思想伝統（ヘブライズム）」の軸上にある、と結論した。

「二」また、ヨーロッパにおける中世から現代までの哲学は「存在論」「認識論」「生命論」を含む神観、世界観、人間観の学である。この哲学の原理は「存在、生命、知性（認識）」という三一Eias⁶にあり、このEiasの各要素はヘブライの「神」の中心的性格でもあった。さらに、この神の似姿（imago Dei）が「人間精神」であり、したがって、人間精神は神の「Eias」の似姿でもある。そして、かかる思想は、ヘブライズムが紀元前後からヘレニズム（古代ギリシャ哲学）に触れ始めて創り出されたところの西洋思想の重要な一要素である、と結論した。

「三」以上を前提に、ヨーロッパ中世では、哲学の原理は「ヘブライの神」「在りて在る者」即ち「存在」であって、これを原理にした新たな中世哲学（存在論を中心）が生まれた。⁷

また、「人間精神」（imago DeiのEias）を中心し哲学を始めた近世では「知性（認識）」を原理にした哲学（認識論を中心）が生まれた。そして、現代では、人間精神の「存在／実存」を原理にした哲学（存在／実存の哲学）や、生命を原理にした哲学（生の哲学）、また新たな認識論（心の哲学）が生まれた。

このように「中世以降の西洋哲学史」をEiasの展開と解釈することによって一元的に捉えることが可能である、と結論した。

「四」ところで、神や人間の「精神」の持つ「存在、生命、知性

（認識）」のEiasは、実はヘブライズムにだけではなくて、ヘレニズムにも又あった。否むしろヘレニズムにこそ、その完成形態があつたのである。これを古代新プラトン主義・プロクロスの哲学体系の第二段階において確かめた。⁸

ヘレニズムとヘブライズムの両伝統には、このように一見同じようなEiasが見られるが、その理由は、実は、ヘブライズムが、紀元後に、新プラトン主義体系の第二段階を活用して、ヘブライの神「在りて在る者」を哲学的に表現したものに他ならならず、そしてこの第二段階こそEiasであつたからである。

こう見てくると、新プラトン主義体系の第二段階は、ヘブライズムとヘレニズムの両伝統を繋ぐ鎖の環の一つであることになる。最初に見た「Transzendental」という精神の在り方は、実は、かかるEiasの在り方に根差しているのであつた。

以上が、これ迄の研究のひとつの結論であり、まとめである。しかしこれは「西洋哲学のひとつの見方」である。勿論、かかる見方に対して異論の多々あることも承知している。

二 問題提起

「五」さて、ここに自ずとひとつの間が現れてくる。それでは「ヘレニズム（古代ギリシャ思想）」における万有の根源である「善」とは「一体何か」という問である。周知のごとく、これは、新プラトン主義の哲学体系では第一段階の「善あるいは一者」（最高始元）と言われる。

この「善」はしかし、中世から現代までの西洋哲学（存在優位の思想）においては「存在論化」され、古代ギリシャのオリジナルの意味では受け継がれて来なかつたということが出来るように思われる。そしてこのことは、西洋哲学史上、注目すべき一事であると思われる。

そこで拙論においては、古代ギリシャにおけるかかる「善」の思想を、それも「存在論化」する以前の思想に、敢えて踏み込んでみたい。とは言え、これは単純には扱えないテーマである。なぜなら、このギリシャの善は、ナマのままでは今日私たちには伝えられてはいないところの最も基本的な思考枠だからである。

そこで改めて問題を提起しよう。「古代ギリシャにおける善とは何か。」ここで言う「善」(agathos)は「万有の根源」(arche, telos, logos)を指す。この間はしかし、このままではテーマとしては大き過ぎるので、哲学に限定して「古代ギリシャ哲学における善の原理・形而上学の原理」たる「善」とは何か」と定式化した。

三 探究場の設定

「六」さて次に、かかる「善」を探究する足場を築かねばならない。今日の私たちの通常の理解では「善」は倫理や道德の概念であって、「万有の根源」という形而上学的原理(哲学原理)ではない。この一事を顧みただけでも、古代ギリシャにおける「善」の概念は、今日のそれとは大分趣が異なっていることに気づかされる。したがって、古代ギリシャの「善」を今日の善の意味で捉えるならば、問題そのものの本質を捉え損なうことになるだろう。これを避けるために探究の足場を慎重かつ堅牢に築かなければならない。勿論、探究の方法論も不可避の課題となるが、今回は扱わない。これは別の機会に委ねたい。

「七」「古代ギリシャにおける善とは何か」をめぐる探究の場は二つある。ひとつは「哲学史」であり、いまひとつは「哲学」である。この両者がいわば交わるところにこのギリシャ的な善(万有の根源)の探究の場が拓かれてくる。そこで差し当たって、こ

の問題を、まず第一に、「哲学史」において探究する。その際には原則的に、ジルソンの哲学史観に基礎を置く。これは「存在」と「善」を探究する共通の時間軸になり得るからである。

第二に、「哲学」において探究する。その際には原則的に、古代ギリシャ哲学の総合ないし総括とされる新プラトン主義に基礎を置く。新プラトン主義体系の第二段階はヘレニズム(古代ギリシャ思想)とヘブライズムを繋ぐ一つの環であるゆえに、「善」と「存在」の哲学的連関を見定めるに好都合であるからである。

以下に、これらの二つが交わる場において、拙い探究を試みてみたい。

本論

一 善と存在の関係(一)・・・存在優位の伝統における

「八」さて、始めに「存在優位の伝統」における「善」と「存在」の関係について若干見とおきたい。ジルソンによると存在論(ontology)は本格的には中世に始まる。その基礎は「存在と本質の区別」にある。この区別は「在りて在る者」(ego sum qui sum)というヘブライの神の概念から導き出された中世哲学の基本思想ともなる。中世の存在論はこの基本思想を土台に成立した。これは古代ギリシャ思想にはない「存在の概念」であるとジルソンは言う。

中世では、この存在論を最基底に置いて、神、世界(宇宙)、人間(精神)の解釈がなされた。ここから神学(theologia)、宇宙論(cosmologia)、霊魂論(psychologia)が成立する。これらはいわゆる「形而上学(metaphysica)」と呼ばれる⁽⁹⁾かかる存在論や形而上学が「中世哲学」の中心をなしている。以後、「神、世界、人間」は「存在」を土台にしたヨーロッパ哲学の骨格となる。この中世哲学から、ルネサンス期に新たに「近現代の諸学(mod-

erne Wissenschaften)」（近現代哲学や近現代科学等）が生まれた。しかし中世と近代において存在論は基本的に連続している。したがって存在論は「中世以後の哲学」と「近現代の諸学」を支える共通の最基底・基盤となっている。この意味でジルソンは西洋中世以後の思想を「存在優位の思想」と特徴付けた。

「九」ジルソンによると、「存在と本質の区別」という存在論の基本思想は、ヘブライの神である「在りて在る者」を「存在(esse)」と解釈したところに端を発する。この「存在」は「存在そのもの」(esse ipsum per se subsistens)、「存在の純粹現実態」(actus purus essendi)、「第一の存在者」(primum ens)等と呼ばれるが、この意味内容は「神においては存在と本質は実在的に同一であり(esse et essentia sunt idem secundum rem)、ただ観念的にのみ区別される(distinctio secundum rationem)」ということである。これが存在論の土台となる。ここから「神と区別された被造物においては、存在と本質は実在的にも観念的にも区別される」ことになる。この命題から「存在論」は始まる。ジルソンは、これをトマス・アキナスをモデルに考えている。彼がネオ・トミストと言われる所以である。

では、「善(bonum)」はかかる「存在(esse)」に対して如何なる関係にあるのか。トマス・アキナスによると、神においては「存在」は同時にまた「善」でもある。善と存在は並列している。(また、被造物においても「存在」も「善」も超越的概念 transcenditであり、置き換えられ、並列している)。すなわち存在と善は同じ一つのもの *res* でありながら、観念・概念において異なる。

「一〇」近世以降、かかる善の概念は、次第に「存在論(ontolo-

gia)」から消えて倫理学(ethica)においてのみ残されていく。したがって、善の概念は形而上学(metaphysica)からも次第に消えていく。さらに今日では、私たちが理解している善の概念は、倫理学や道徳においてさえも、実質的内容が非常に乏しくなっていることに気づかされる。善の概念が存在論から浮いていったからである。しかし「存在」が哲学・形而上学の概念として、存在論の中心的役割を果たしていることには、今日も変わりはない。以上が、存在優位の思想伝統における「存在」と「善」の正しい関係である。

以上から、ヨーロッパ哲学(中世・現代哲学)においては「存在」よりも根源的なものはない。また「在りて在る者」(神)よりも上位者は居ない。これが、今日も哲学において存在論が諸学の土台たる地位を保ち続ける所以である。

二 善と存在の関係(二)・・・善優位の伝統における

「一一」さて、次にヘレニズムつまり古代ギリシャ思想における善と存在の関係を、おおまかに見ておこう。タレス(Thales, 550 BC)以来の一千年余に及ぶ古代ギリシャの哲学的思索の結果を、或る意味で総括した哲学が、新プラトン主義であるとされる。この新プラトン主義の中でもプロクロス哲学においてこれを見ておこう。

上述のごとく、プロクロス哲学体系の第一段階・万有の根源は「善あるいは一者(τὸ ἄνω γὰρ τὸ εἶναι) (以後「善一者」と略す)と言われる。この段階から第二段階の「存在者」(τὸ εἶναι)——生命(ζωή)——知性(νοῦς)の *Eias*・*Toids* が発出する。発出したものは全て上位者の「善」を分有する。この意味で、*Toids* の各項は「善」と言われる。故に、第二段において「存在(者)、生命、知性は夫々善である」と「善」を述語付けることができる。この意味で、第二

段階では善と bias は並列し、置き換えが可能となる。

「一二」しかし、プロクロス哲学の第一段階の「善一者」は最高始元 (ἀρχή μορφή) であり、存在 (者) の原因であり、したがって存在 (者) を超えている (ἐπέκεινα τῆς οὐρανοῦ)。これをジルソンは「善優位の思想」という。

この思想は「善」を最基底に置いて、神観、世界観、人間観を構成する。勿論、「善優位の思想」には「存在 (者)」の概念もあり「存在 (者) のロゴス、」即ち「存在論」も含まれるが、「存在論」がその思想の最基底にあるというわけではない。善は存在 (者) を包括し存在論の基底にある (このことはトマス・アクィナスも理解していた)。

このように古代ギリシャ思想における「善」と「存在 (者)」の関係性をひとまず定位することができるだろう。

「二三」しかし、かかる善は、果たして何処までロゴス化が可能であろうか、これは種々の意味で問題となるが、しかしひとまず「善 (一者) のロゴス」という意味で、これを agatho-henologia (vel agathologia vel henologia) と記述することになる。すなわち「善優位の思想伝統」では、agatho-henologia (善一者論) が ontologia (存在論) を包括し、ontologia の基礎となる。⁽¹⁶⁾ 以上から「存在優位の思想伝統」と「善優位の思想伝統」とでは「善と存在 (者)」の関係が根本的に異なっていることを、ひとまず理解することができるであろう。

三 善の探究 (一)

(i) 目的 (τέλος)

「一四」そこで以下に、「善 (一者)」を、「バイドン」のソクラテ

スに倣って、「ロゴスに逃れて εἰς τοὺς λόγους καταφεύγοντα」(あるいは第二の航海 δευτέρως πλοῦς によつて) 扱つてゆくことにしよう。⁽¹⁶⁾

まず、探究の手掛りとして「善とは何か」が或る程度了解されていなくてはならない。そこで差し当たつて、これを「目的 (τέλος)」という程の意味と解しておこう。そして探究を進めていく中で可能なかぎりこれをはつきりさせていくことにしたい。

さて、以下に、コンフォード (Francis MacDonald Cornford, 1874-1943) の *Before and After Socrates* (Cambridge, 1932) における見解に従つて、話を進めたい。

同書によると、前ソクラテス期、特に哲学の父祖・タレス (Thales, 585 BC) に始まるイオニアの自然哲学の系譜(デモクリトス迄)では「万有の根源を「万有の質料因」「自然」の素材」と捉えて探究したが、ソクラテス (Socrates, BC 470/69-399) は「万有の根源」を「万有の目的因(善い)」と捉え直して探究を始めた。これがプラトン (Platon, BC 427-347) からアリストテレス (Aristoteles, BC 384-322) に受け継がれて、それぞれ目的論的な哲学を形成したとされる。そしてソクラテス、プラトン、アリストテレスの三哲学を、彼は善を熱望する「憧れの哲学 (philosophy of aspiration)」と呼ぶ。

したがって、コンフォードによると「目的(善)」の発見はソクラテスに始まることになる。

(ii) 古代ギリシャの神話 (一) ・ヘシオドス

「一五」そこから「ソクラテス以前には目的・善を求める思想はなかった」と考えられるかも知れない。しかしそれは短絡的な誤りである。コンフォードの言うように、ソクラテスからアリストテレスに到る三世代の哲学的思索において、目的論的な「憧れ

の哲学—善の哲学—が形成されたとしても、ソクラテス以前にも、哲学ではないが広い意味で「目的（善）」に基づく神観、宇宙観、人間観は、既にあつた。と言うよりも、「目的」としての「万有の根源」の思想と「質料／素材」としての「万有の根源」の思想とが、既に、前ソクラテス期以前（神話時代）に未分離の形であつた、と思われる。

それを見るために、古代ギリシャの神話を見ていこう。ここに取り上げるのは、ヘシオドス(Hesiodos, c.700 BC)である。彼の『神統記』(Theogonia)と『仕事と日々』(Erga)を取り上げたい。以下、廣川洋一『ヘシオドス研究序説』(一九七五)とF. M. Comford, *From Religion to Philosophy* (1912)に沿って見ていく。

(iii) 古代ギリシャの神話 (ii) : 『神統記』 theogonia と cosmogonia

「一六」『神統記』は「神々の誕生物語 (theogonia)」であると同時に「宇宙の誕生物語 (cosmogonia)」である。この「詩」によると、最初にカオス、ガイア、タルタロス、エロスの四柱の神々が生まれた。次に、この原初神から次の世代の神々が生まれた。例えば、カオスからエレボスとニュクスが生まれ、さらにニュクスからヘメレ等が生まれた。またガイアからウラノス、ポントス等が生まれた。さらにガイアとウラノスとからクロノス、オケアノス、ヒュペリオン等が生まれた。このようにして次々と神々が生まれ出た。生まれた神々は「自然物」と同じ名をもっている。例えば、ニュクスは「夜」、ヘメレは「昼」、ガイアは「大地」、ポントスは「海」、ウラノスは「天」、オケアノスは「大洋」云々といった具合である。

これが「神々の誕生物語」と言われる。

「一七」ところで、神話時代の神の名は「神自身」と同時に「彼が支配する自然」をも指していた。例えば、ニュクスという名(言葉)は「夜を支配する女神」であると同時に「自然現象の夜」をも指していた。「ガイア」という名(言葉)は「大地を支配する女神」と同時に「自然の大地」をも指していた。いわば「人間」という言葉が今日でも「人間の精神」と同時に「人間の身体」をも指しているのに似ている。しかし、今日では「人間」はひとまじ「精神」と「身体」に区別されるが、古代ギリシャの神話時代には、両者の区別はなく未分で渾然一体となっていた。ガイアと言えば「女神」と「大地」の区別はなく、両者を渾然一体に指していた。この両者の区別は、後代に次第になされるようになった。

したがって、「ガイア」が生まれたことは同時に「自然の大地」が生成したことを意味しているし、「ニュクス」と「ヘメレ」が生まれたことは同時に「夜」と「昼」が生成したことに意味し、「ウラノス」や「ポントス」が生まれたことは同時に「自然の天」や「自然の海」が生成したことを意味している。このようにして神々の誕生が自然宇宙の誕生をも同時に物語っているのである。ここに「神々の誕生物語」が「宇宙の誕生物語」と重なるゆえんがある。

また、「生まれる」ことは「生物・生命」の特徴であるゆえ、ここには古代ギリシャの「生ける自然観」即ち「物活論」が神話の形で出現していることが見て取られる。

このような「宇宙の誕生物語」が、タレスを始めとするイオニアの自然哲学の先駆であることは、既に多くの研究者(コーンフォード、廣川等も含めて)が指摘するところである。

(iv) 古代ギリシャの神話 (iii) : 『神統記』宇宙の秩序原理「一八」また、『神統記』によれば、ウラノスの子クロノスは父

親ウラノスを倒して宇宙の支配権を奪った。そしてクロノスの子ゼウスもまた父親クロノスとその世代(ティタン神族)と戦い、父親クロノスから宇宙の支配権を奪う。このときゼウスは、以後、再び、支配権の争奪戦などの無秩序が起らないように、ひとつの工夫をなした。それは、

「彼(ゼウス)は 神々に それぞれの権能を分かち与えた」⁽¹⁸⁾のである。

すなわち、ゼウスは、神々に、それぞれの「権能・特質」を与え、これを守るようにと定めたのである。物語では、ゼウスは先ずメティス(賢明)を娶り、正しい判断の具現者となった。次に、彼はテミス(秩序、掟)を娶り、ディケー(正義)等を生んだ。こうして次々と全宇宙の神々を生み、彼らに夫々応分の役割・分・限度(Επα)としての「権能」を与えた。この「権能」は、全存在者の守るべき「限度」として後の哲学者ヘラクレイトスにも影響を与えている(B94)、と廣川は言う。

そしてもし神々が自分の「限度」を越えると、それは秩序破り・掟破りの不「正義」となり、その結果「報復」(Επί)・罰を受ける。こうして正義を回復する。これを神々と宇宙の全体に適用した。こうしてゼウスは全宇宙の秩序・正義を完成する。かかる秩序原理を廣川は「テミス・ディケー」(掟と正義)と呼び、これは人間生活にも当てはまるとしている。

「一九」ここに、全ての神々・全宇宙が自らの役割としての「権能」・「限度」を守り、その結果、宇宙の「秩序と正義」を守ることを目指す(目的とする・善い)、という「目的論的宇宙観・神観」を読み取ることができる。そして、ここにコンソフォードの言う「憧れの哲学」の萌芽が認められる。

この目的論的宇宙観は後に学化されて一部は「自然宇宙の法

則」となる。この法則性は「目的論的な法則性」であり、古代後期の実証科学の目的論的性格の源である。しかし、これは「存在優位の伝統」下に生まれた近代科学の「機械論的な法則性」とは趣を異にすることに留意しなければならないだろう。

(v) 古代ギリシャの神話(四)・人間の秩序Ⅱ宇宙の秩序
「二〇」次に「仕事と日々」においても「テミス・ディケー」の秩序原理が働いているとされる。『仕事と日々』は人間生活と労働をテーマとした詩である。ここでは人間生活においても労働を適正にかつ「限度」を弁えて執り行うことがディケー(正義)であるとされる。

さらにヘシオドスは、「正義」は「善」であるという思想を表明している。その証拠として廣川は次のテクストを上げる。

「クロノスの子ゼウスは創った、より正しき且つより善き、
神的な英雄の族を」⁽¹⁹⁾

この箇所「より正しき且つより善き」(καλοτερον καὶ δεον)の比較級を、廣川はプロクロス等の古注に従って「正しく且つ善い」(καλον καὶ δεον)⁽²⁰⁾と原級の意味に解釈している。ここより「正義」即「善」の思想が既にヘシオドスにあったと読み取ることができらう。したがって、ヘシオドスにおいては、テミス(秩序・掟)、ディケー(正義)、アガトン(善)は、緊密な意味連関の下にあったと見るができるだろう。

(vi) 太古のギリシャの「善」の思想

「二二」ヘシオドスは「神々と自然宇宙と人間」の全体にひとつの秩序原理「テミス・ディケー」を見、これを探究したひとりということが出来る。「全体」とその「秩序」の探究は「哲学」の本質的・本来的な営みである。ここに哲学の夜明けとされるヘシ

オドスの思想史上の位置を見定めることができる。

また、全体は「テミス・デイケー」を「善」として目指す。ここにヘシオドスによって、神々・宇宙のみならず人間もまた「目的論的な在り方」をしていると理解されていたことが分かる。この思想は、以下に見る如く、古代末の新プラトン主義に至るまでその思想の核心において受け継がれている。

これは、あるいは、記録の未だ存在しない太古のギリシヤの特微的な思想のひとつであったと推測することも可能だろう。「善」の思想は既に古代ギリシヤに太古からあったが、それがヘシオドスに「テミス・デイケー」の「神話」となって現れた。そしてソクラテスに到ってこれがやっと哲学化され始め、そして目的論的「哲学」が形成され始める（コーンフォード）と見ることもできらう。

しかしかかる「善」の思想は、ヘブライに太古からあった「存在論的な思想」とは根本的に異なると言わねばならない。ニーチエに従って言うならば、この相違は言語の文法構造の相違に由来しており、ギリシヤで形成される「善の哲学」(agatho-henologia)も中世以降の「存在の哲学」(ontologia)も、夫々の太古の故郷への帰還・「高級な先祖帰り」であると言いうことができるかも知れない。

(*投稿規定により、以下は「善一者論と存在論(二)」に続く。)

(1) 渡邊二郎監修『西洋哲学史の再構築に向けて』(昭和堂、二〇〇〇)の第五章(拙稿)参照。

(2) この二区分は、ヘーゲルのいわゆる「古代ギリシヤの哲学(理念の展開)」と「ゲルマンの哲学(精神の展開)」には対応する。

これについては拙著『プロクロスとトマス・アクィナスにおける善と存在者』(見洋書房、一九九三)参照。

(3) ここで使用する「ヘブライズム」とはたんに古代ヘブライの思想のみならず現代までのキリスト教、ユダヤ教、イスラーム教の思想も含む広義の意味である。

(4) これはヘーゲルやニーチエ等の考えとも一致する。たとえば、ニーチエは、哲学は言語文法の構造によって類型が決まるとする。ヘレニズムの言語(古典ギリシヤ語や古典ラテン語など)はインド・ヨーロッパ語族に、ヘブライズムの言語(ヘブライ語)はセム・ハム語族に属している。したがって西洋には、かかる二大言語族から由来する二大思潮が存在することになる。

(5) ここで使用する「ヘレニズム」の概念は、古典古代と区別された狭義における意味ではなくて、広義の意味で、古典古代も含む古代ギリシヤ思想一般を指す。

(6) この三一三一(313)は、いわゆるキリスト教の啓示神学における父、子、聖霊の三位一体(Trinitas)とは異なる。

(7) ヘレニズム(=古代ギリシヤ思想)に存在論の源泉があるも、これは中世以後の存在論とは性格が異なる。本論参照。

(8) 拙論「新プラトン主義と西洋哲学史―古代新プラトン主義体系における第二段階の展開―」、『新プラトン主義研究』第三号(新プラトン主義協会編、二〇〇三)、一―三四頁参照。

(9) ジルソンは勿論、善優位ではなくて、存在優位の立場に立つ。これは現代西洋人としての不可避の態度である。なぜなら、西洋人は存在論から神と世界と人間を見ているので、最初から「存在論のフィルター」をつけていることになる。したがって、彼らは存在論の視野と色彩の下で神、世界、人間を見ていることになり、存在論の視野に収まらないものは、彼らには見えないか、もしくは存在論の色彩に染め変えてしまう。換言すれば、存在論を超えたものは彼らの視界に入らないか存在論化するのである。その結果、二千年の西洋の歴史が示すごとく、「存在論の色彩」を反

映したギリシャ思想解釈(「存在論化」)を許す結果となる。私の意図は、この「色光」を可能な限り漂白し、白色光の下で古代ギリシャの思想を見直し、ここから西洋哲学史全体を解釈し直すとするものである。しかしこのような無謀なこと(?)は、解釈学的見地から果たして可能かどうか、慎重な検討を要するであろう。ここに方法論が課題となる所以がある。

(10) 前掲拙論「新プラトン主義と西洋哲学史—古代新プラトン主義体系における第二段階の展開—」

(11) 後「Christian Wolfは「形而上学」を「一般形而上学 (metaphysica generalis)」(存在論)と「特殊形而上学 (metaphysica specialis)」に分ける。

(12) 古代ギリシャ哲学においては中世哲学の意味で「存在 esse と存在者 ens」の区別はない。

(13) 「存在優位の思想」は、新プラトン主義体系の第二段階を借用して神を表現した結果、神において善と存在(者)は実在的に同一であり、観念的に区別された諸概念となった。

(14) 存在優位の伝統には存在論 *ontology* はあるが、善一者論 *agathohologia* はなご。

(15) *Pl. Paedo.* 99 e 4-6

(16) *ibid.*, 99 c 9-d 1

(17) 彼によると「魂の発見」もソクラテスである。*Before and after Socrates*, p.50 seqq. (この翻訳書に大川瑞穂『コーンフォード ソクラテス以前以後』(1972)等がある。)

(18) Hesiodos, *Theogonia*, 885, τοῖαι ἐδὲ θεόγονοιο τιμὴς,

(19) Hesiodos, *Erga*, 158-9, Ζεὺς Κρονίδης τήλοιο, θεογονίης καὶ ἀποιου, διὰ θεῶν ἠεὶ δαίμων ἕταρος,

(20) 廣川前掲書一八〇頁。

.....

【追記】 本稿は平成二一年度〜一四年度に文部科学省科学研究費

補助金(基盤研究(B)(一)課題番号一四一〇〇一一)による研究結果である。記して関係各位に謝意を表す。